

圃光
說

菟道園

五

13
1456
5



門へ遠 13
1456
巻 5 止

圃老菴說苑道言卷五

光林房伴作緘首を激して味方不素く復

之弘二年の春北は相模吉平高時入道宗賢まふ
正不正ふて民の敵并を二敵は逸遊を事とす
新坐本座北田樂を呼下して希ひ大を集て闘しめ
自歎碎狂れありさる自天魔乃たあは誰感せしむる小や
と上下奇怪の思ひをわらふ以謙念北樹は天狗餅と
ひひかりし其賊士民北門をえらばは毎小つてふて
このちや又夜はさるもの了物小あむをかかひは踏殺
さる夜後を剥るるとして其曾よりけりては性暴之
去民我慄て舌をあらひ謙念中あさやかあはけり



十の百の七十九



ちり小西塔乃思谷子光林房乃津原とてあり
 天台座主大塔なる雲法親王東夷征討乃出陽謀乃
 おしりしらふたれまきまき下毛此二荒山を脱け乃
 禮と披瀝し深山なる時入たが勅諭伺はん
 下里豫念を能細しうなが勢乃事もふあはに鉄杖
 をかして麻衣をよさうかほよ日や西山は渡して青
 舟のほのろきまをん志づあまあむ向へ血を此義士三人
 そまて禱れ禱るくう里あけま杖を帯しうるか活
 ちてゆくを笑へ何か一夜天狗とてそのあはれものか
 いたもて旅かうむせでかめ捕おと殺てん本意な
 かなべし生るまう屋敷のる遊んよとふへ賞賜あらん

と之いふひとまらまうあうていふまやあふ殺る
 嶽れ僧正坊もせよ志室の山れをうはれあませよね
 かひめきとて承悟の鼻ひきしうせんまると荒言
 ちりひ光林房れりうより安んをえかえり
 罵りし光林房あやうられ豫念中よあさまかく
 怪異れりともゆまばとて是追補士に夜廻りせり
 ありんとてひて行程よやかく極楽寺に切通しあか
 林乃義より踊いづるものあつまかの義士ホす天狗とて
 ころんあまや中よあつとまあてりすふとひりめく
 光林房ハ希代の親物と本意をわこころうわへ何
 さぬ天狗とてあまやや咄角かまりて鶏りてくさ小翅

あまて手^て山^{やま}休^{やす}乃^のやう^うあるが^が大^{おほ}勢^{せう}小^こと^とり^り合^あ果^{くわ}母^ぼを^を向^{むか}
 けて^てうち^{うち}例^{れい}以^も士^しと^とも^もこ^ここ^こ人^{ひと}に^に被^ひつ^つま^ま切^きて^てか^かき^きは^はを^を持^もて^て
 花^{はな}め^めく^くら^らま^まか^かい^いく^くま^まて^てい^い刀^{やいば}を^を棄^すれ^れい^い足^{あし}を^を向^{むか}き^きて^てハ^ハ踏^ふき^きて^て
 子^こか^かの^の勇^{ゆう}士^しと^とも^も先^まの^の玄^{げん}系^{けい}小^{せう}似^に古^こや^やら^らて^て踏^ふら^らま^まて^て即^{すなは}ち^ち
 死^しに^にも^もあ^あま^ま寂^{じやく}を^をか^かう^うむ^むま^ま途^とる^るも^もあ^あま^ま先^ま林^{りん}房^{ぼう}も^も天^{てん}物^{ぶつ}乃^の
 け^けこ^こま^まめ^めさ^さな^な一^{いっ}き^きよ^よ方^{かた}を^をか^かめ^め懐^{くわい}初^{はつ}れ^れ離^りに^に由^{よし}め^めす^すか^か
 い^いま^ま坂^{さか}本^{ほん}や^やう^う此^{こゝ}絆^はき^きり^り小^{せう}せ^せんと^と目^めも^もを^を取^とり^り見^みて^てあ^あま^まは^は
 天^{てん}物^{ぶつ}が^がと^とう^うら^ら笑^{わら}ひ^ひ踏^ふら^らま^まて^て士^し乃^の衣^い被^ひ刀^{やいば}を^を棄^すれ^れま^ま
 こ^こい^いま^ま子^こか^かい^い也^や又^{また}い^いま^まの本^{ほん}産^{うぶ}れ^れ志^しけ^け之^の跳^はり^り光^{ひかり}林^{りん}房^{ぼう}清^{せい}
 け^けを^をと^とめ^めて^て志^しひ^ひ乃^のみ^みま^まは^は一^{いっ}切^{けつ}く^く茂^さき^き林^{りん}の中^{ちゆう}小^{せう}園^{えん}一^{いっ}き^き
 乃^の天^{てん}物^{ぶつ}も^も捨^す余^{あま}人^{ひと}を^をあ^あま^まと^とひ^ひ右^{みぎ}て^て本^{ほん}林^{りん}系^{けい}捨^すあ^あつ^つめ^め焚^{くわ}

火^かを^を一^{いっ}屍^{しかばね}を^をか^かけ^け腕^{うで}あ^あつ^つて^てあ^あま^まは^は中^{ちゆう}へ^へ入^いる^る
 天^{てん}物^{ぶつ}棄^すれ^れま^ま一^{いっ}衣^い被^ひを^を投^なげ^げ一^{いっ}是^{こゝ}ア^アん^ん途^と録^{ろく}余^{あま}乃^の弓^{ゆみ}と^と是^{こゝ}此^{こゝ}
 捨^すれ^れま^ま若^わ者^{しや}と^とも^もか^か日^ひ以^も刀^{やいば}割^わり^り乃^の弓^{ゆみ}を^を引^ひく^く乃^の指^{さし}さ^さ
 者^{しや}乃^の同^{どう}小^{せう}坂^{さか}を^をう^うま^まて^て出^であ^あひ^ひ暮^くす^すま^まて^てい^いま^まと^とも^もせ^せ是^{こゝ}是^{こゝ}夜^よの^の
 徒^たづ^づま^ま一^{いっ}た^たま^まお^おぬ^ぬ一^{いっ}ま^ま酒^{さけ}の^のま^まう^うち^ちを^をま^ま一^{いっ}ま^まを^を
 輝^か火^かせ^せま^ませ^せま^まる^る也^やい^いま^まひ^ひと^とえ^えと^とて^てあ^あま^まは^は右^{みぎ}柳^{やなぎ}
 の^のお^おら^らた^たう^うま^まて^てい^いま^ま後^ごに^に返^{かへ}来^これ^れ本^{ほん}林^{りん}系^{けい}を^を物^{ぶつ}と^とし^しり^り指^ささ^さ
 ま^まん^んと^とい^いま^ま大^{おほ}勢^{せう}天^{てん}物^{ぶつ}も^も右^{みぎ}す^すま^まひ^ひ也^や一^{いっ}魁^{くわい}首^{くび}乃^の此^{こゝ}働^{はたら}
 今^{いま}小^{せう}何^{なに}め^めぬ^ぬ事^{こと}も^もて^てい^いま^まあ^あつ^つハ^ハ夕^{ゆふ}も^も入^い道^{だう}乃^の屋^や被^ひ子^こめ^め
 され^れま^まる^る回^{わい}来^これ^れ法^{ほふ}師^し亦^{また}物^{ぶつ}揚^{やう}ま^まて^てあ^ある^るを^を持^もり^りけ^けて^て若^わ者^{しや}官^{くわん}
 小^{せう}路^ろの^の过^かり^り夜^よさ^さく^く風^{かぜ}小^{せう}吹^ふき^きい^いま^ま法^{ほふ}師^し亦^{また}屋^や被^ひ子^こめ^め

一竹を以てやせざるまで少く小坂を東へ向ふたを室一く
かへりて竹をふとがなるを以て老林房毎さめてとやうに
天狗も化して織をあらと見えたりさゆりもさき起り目
さゆりもさき起り目さゆりもさき起り目さゆりもさき起り目
思ふまゝよすまゝに日一天狗とて旅出立乃武士とお馬
まをもちふひつ提走王馬を斜に射すれお小引人いあや
やうさき今や月を敵へ逐うると小町は近まかりあま
らやう早馬を鞭を以て弛い事れやうと竹んといふん
馬は法藤藤で剣をさせ引極んで糸いと小織を
きんとてとちつ河をりれ使とせよとてつち天狗とて
からとて武士小腕引く責さあむ小くはに路を地よ

つけて命ばかりの脚をりたやうの中ゆらん下宿の敷亦彼
つ纏の花飾をいさしてこの帝は陳陳線あはきす子
子黨れめく一時刻をうりたけりむけらま京敷の
發動安かゝる一大事出来いて行行無多太布た射す
謙倉若れは形へ進進乃は使を家王おし月をついでま
ゆりもさき起り目さゆりもさき起り目さゆりもさき起り目
彌出此客事入乃乃まごまぬ事ひ園東共軍が勢
小のあはるあるべしやいひさぬ鉄杖とらまのべり竹の
武士此路をてらうどうしてはみらんかけて絶入るま
うて遇射は張良陳平もそ智を失ふとかや又勢は天
狗もさき起り目さゆりもさき起り目さゆりもさき起り目



あゝ不思儀乃思儀式^{しんぎ}まきく不^ふ後^ご堂^{だう}一^{いつ}通^{とう}湯^{とう}もふく河^か釋^{しやく}
 する古^{ふる}草^{くさ}鞋^{せう}を^を返^{かへ}あまつ^つは孫^{まご}事^{こと}は活^いを^をあ^あれ大^{だい}事^じ此^{こゝ}實^{じつ}家^け
 を^を打^{うち}殺^{ころ}する^る糸^{いと}き^きめ^める^る曲^{まが}者^{もの}と^と既^{すで}小^こ死^しか^から^らえ^えづ^づる^る智^ちひ^ひ
 光^{ひかり}林^{やしき}房^{ぶどう}の^の乾^か笑^{わら}して^{して}天^{あま}狗^{いぬ}違^{ちが}ひ^ひの^の今^{いま}笑^{わら}ま^ます^す一^{いつ}の^の六^む段^{だん}
 する^る金^{かね}を^を一^{いつ}嗔^{ちん}を^を舞^まめて^て悪^{あく}徳^{とく}を^を言^{こと}を^をま^まま^まる^る時^{とき}分^{ぶん}射^{しやう}
 法^{ほふ}作^{さく}の^の敷^{しき}敷^{しき}の^の意^いを^をあ^あい^いか^から^らは^はし^し心^{こゝろ}は^は逆^{さか}威^いを^を振^ふひ^ひ積^{せき}
 悪^{あく}の^の玉^{たま}玉^{たま}天^{あま}珠^{たま}巴^は子^こあ^あい^いは^は大^{だい}塔^{たつ}の^の字^じ法^{ほふ}就^{しゆ}ま^まか^から^らけ^けり^り
 も^も解^げ脱^{だつ}同^{どう}相^{さう}乃^の河^か衣^いを^を脱^ぬせ^せ後^ごハ^ハ堅^{けん}甲^{かう}利^り之^の庄^{じやう}貌^{ぼう}を^を
 何^{なに}ん^ん一^{いつ}累^{るい}後^ご此^{こゝ}辰^{しん}襟^{きん}を^を休^{やす}ん^んせ^せん^んと^と義^ぎを^を笑^{わら}ま^まる^るの^のふ
 ら^らふ^ふか^かか^かて^て本^{もと}寺^{てら}に^にお^お掛^かけ^け坊^{ぼく}を^をい^い大^{だい}和^わ河^か内^{ない}へ^へつ^つか^から^らさ^さき^き城^{じやう}郭^{かく}
 子^こあり^りぬ^ぬ庭^{にわ}き^き地^ぢを^をと^とん^んさ^さし^しめ^めあ^あふ^ふ悪^{あく}徳^{とく}を^をい^い又^{また}園^{えん}東^{とう}へ^へ下^{くだ}し

多^{おほ}ひ^ひ保^{たも}家^け此^{こゝ}氏^{うぢ}族^{しゆく}の^の凡^{ぼん}牙^がを^をか^かし^しひ^ひを^をみ^みお^おる^るを^を備^ひ保^{たも}せ^せる^る
 ひ^ひを^をお^お子^こ備^ひ者^{もの}を^を下^{くだ}し^しま^まと^と小^こ解^げ首^{くび}に^に天^{あま}狗^{いぬ}を^を付^つけ^けめ^めと^とあ^あく
 次^{つぎ}子^こ負^おる^る翅^{はね}を^を後^ごに^に拍^{ちやく}此^{こゝ}面^{めん}を^をと^とる^る解^げと^とみ^みへ^へ一^{いつ}の^の二^にハ
 は^はか^かの^のと^とあ^ある^る小^こ冠^{かん}者^{もの}に^につ^つき^きた^たく^くま^まり^り瞳^{ひとみ}光^{あかり}て^て蒼^{そう}衣^い乃^の者^{もの}
 こ^この^のや^やう^うの^のと^とし^して^て去^こふ^ふを^をつ^つき^き塊^{かたまり}入^いる^るふ^ふ光^{ひかり}林^{やしき}房^{ぶどう}の^のふ^ふを^を励^{げん}
 一^{いつ}此^{こゝ}逆^{さか}違^{ちが}乃^の容^{よう}貌^{ぼう}を^をさ^さる^る子^こま^ま性^{じやう}より^{より}此^{こゝ}ハ^ハ之^の強^{きやう}盜^{たう}に^にさ^さる^る子^こハ
 ある^るべ^べに^に推^{おし}度^どさ^さる^る亦^{また}平^{へい}氏^{うぢ}の^のた^ため^めに^に保^{たも}を^を失^しひ^ひを^を笑^{わら}ま^まる^る一^{いつ}
 お^おふ^ふに^にさ^さる^る子^こは^は事^{こと}を^をあ^あれ^れと^と笑^{わら}ま^まる^る又^{また}お^お子^こに^に武^ぶ術^{じゆつ}世^よに^にあ^あれ^れ人^{ひと}
 と^とハ^ハ思^{おも}ひ^ひを^を後^ごに^にさ^さる^る子^この^の珠^{たま}を^を懐^{いだ}きて^て生^{なま}涯^{えん}尾^びの^のと^とく^く理^りを^をさ^さる^る
 う^う五^ご條^{じやう}今^{いま}後^ごに^にさ^さる^る子^この^の衣^いを^を笑^{わら}ま^まる^る子^この^の不^ふ耐^た子^こ遇^あて^て衣^い
 口^{くち}を^をひ^ひく^くも^もの^のを^をあ^あれ^れと^と笑^{わら}ま^まる^る子^この^の衣^いを^を笑^{わら}ま^まる^る子^この^の不^ふ耐^た子^こ遇^あて^て衣^い

いふてあ。味方小糸がたのめあるべし。此後遠く
いさづし子死て骸骨此いまさ朝。はる小糸の先よつて清玄
より同し死ぬ命を大君子に人目し餘る此陣て名を
子載子とめ恩賞を子孫よつてて業んとい思ハるや
過てあしたむる子悼事あかき少義をせめて勵すとい
緘主乃小冠者面を赤め此後程害小子おかめ此良
業あり原末よきて緘をあかき清く此小子初りて
父母を失ひ此才三此屋よける後者子業まき人とありて
信りりくやさる時合乃程執をかりる信人此とあすの
疾室よる部をさる程観て身を餘し民間子屈曲し
勇を好む員を病ハ礼也とらけたまひこと此と及乃

周子富ほる保倉の信人東悟さ子不良此心を後
これ不仁子玉王の才不肯あまといも此後乃言子つきて
官よ一命をさけて仕あるん姓名をさきさ中る電多
又祖乃名を汚穢し小恐此今何とめささしやぐを傲
功をさして勇士の内におかづまらさるべしん時ハかのづ
かゝる志ろしめされんと赤ん面子そ落さるは光林房うら
信改て迷子此味方中さるる業感激子堪より倫をさ
もあせまのせんあきとさる風葉此恐まあれを少刻
まああさるもて此辺達乃名を何とあやさんとて之解
を愧る面のお笑を少めてさんけ此の小子をいさる指
とあひま餘もて物乃名よけたがひ小呼ひいとあき光

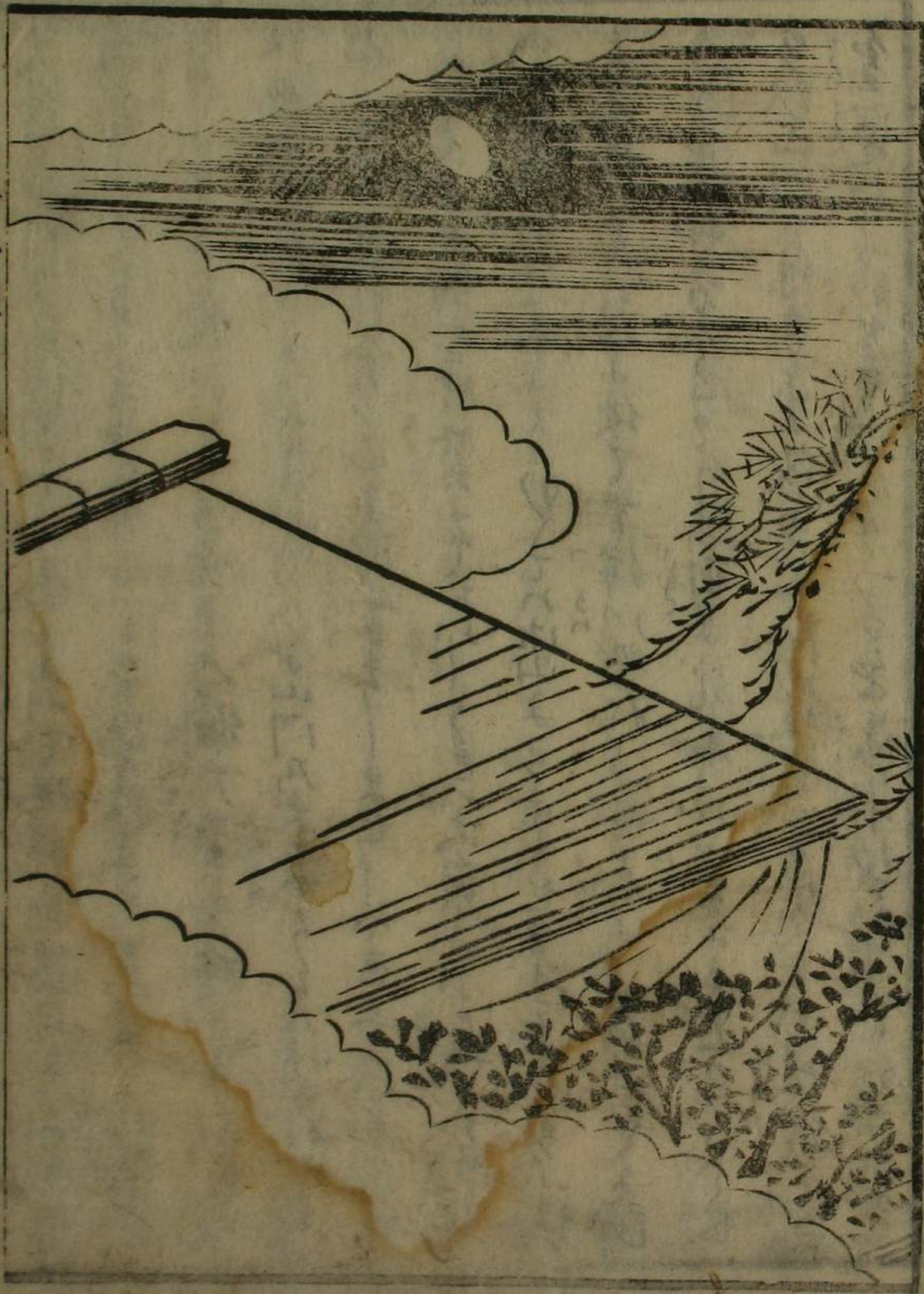
林房もろちあひよしく五俣の紀名まのせんとしこ
 ち松柏あんど折て焚きしころ枝をとり是つらつき
 括拍縁章小ありとしも巳子林梁北氣ありを
 小洞ぬ松柏と比辺の勇氣小能今より去松丸と名
 けりまるとしつ子軒そ括悦斜あは後者等も一曰子
 加笑して僕ホも名を福とつ子光林房れいよくと達
 ちあつて天物乃名を利ひあつ子一計あり五俣かめて
 新田を布義貞としてうど合せわの國なる本味方子
 まみぎしつがまご越後の國小つらつ流をととまかめ
 小池乃里見と名ふ山本を天物乃ま認して勅命あ侍ぞ
 義貞又弛加つきよやと解ありかまつてはは入及北

醉在天魔の所行して計の業あふあつと世と并流僕
 をつて之々の必定彩回ら際まあつるべしと一達とまを
 旁しあ去松丸ぬしつ五俣と終り於子登了と本并安
 吾を伺ひあつとつ子光林房ら計助小同意はる
 又の時すそ暁らかく去松丸のふやうにけりう旅行
 せんす躑を統はるよりちあし暇をば人目あかり
 と後者等をは小國へし向そのち光林房と伴ひ海
 道ををせ出都といふまきつる

去松丸下控判官ら本陳を劫は去
 却説主上流隠謀あつておれまあつて
 乃人くまたちまあつて六波羅に討子小岸山本亦うまは

ちきどくかくてい世の中おごやかあらば相挿入道徳を我
 一帝をへ承久此例に任て幸國へ移し幸皇太塔宮を
 死罪に處しせしむるに同言此幸追補あるべしと之階
 堂下控判官を使りて教に命じてと街北風夜不遠の
 判官武命を合んで上京北形勢を乞士三百餘騎斗
 浪へ東海より出る光林房大子驚き我山もつまじ城
 郭洞の宿軍も弛まのさる先子凶徒乃るあま上
 をとらまきありてわあふ海じいふほして世侵小先ぶつて
 京教子弛行宮よつてけいを奏し山門臨幸を勧
 ちんさうかかす下控判官を路次下隙とせん斗時
 とくお老松丸少判官思慮してま候い小子まおせぬ

判官相根山をうら越へ途中滞りあきあき一計あり
 ち一發を小からし平氏を仇怨する武士等乃ま
 上よまのん此のあはんせ渠油改むを急がし謀合
 ちかき程いんちのみ侍んさうあか山ひしけりち越し
 るも又一計ありし叫て判官う士卒を後子つて山をう
 らとてら路の驛に到るをちかき明林乃社頭本蔭ほ
 のう此方光林房を伴ひ里下いらく小隠て結ぶ判官
 今や月窟北長く敵を本陣よりりしむしむとて敵に
 てらんといふ光林房の老松丸太徳乃謀計を慮
 ばらふあきしむ虎を食ふ駈ちあきばとらけり意
 て林乃らちよひをみおる老松丸やうて判官を旅館



十景圖卷之二



大塔宮より八王子迄まで旗を揚らまきりて先
林房のてこせ宮より賢くも斗ひ多し孔是僅に一計と云
合しと悦びつと志賀乃彌之巻を横きり小宮の
此疎へ此急とくりたる此幾ひ山門乃大衆くらり携り此
娘よと喜ひ合ふ所子臨ませませし王上よりせ
路いで尹大納言御賢よしおけりて大衆大小無きめ
山門愛儀出来しりかくて山山よりせの事かあは
と光林房此疎に依て十津川乃たくと志し為させむ
りり光林房今すく前子此系は宮子王上りてせ
あひ山門此儀を愛儀あくは此儀微勢持ちし小疎幾
至運動かせあふかりつるを深中おかしくありしるも

時運の志ありしつる夫より大塔宮能野子為させし
附玉置之目よかたまきあひ此危難をきりし紀伊
國の任人此長旅六郎七郎を執りし言をすし
此近ひし此系玉置を執りし言をすし
しりし此附此長旅中なるハ此此是程二八をかりし
乃名を光松と名きて大塔宮の十日津河を清出きて
小系へ此通へんとするは一定居りて此子違ひせ給ぬ
福廻りしつる間此使を心持てありて中なる言を
るを此思案あつて此事子此思案合せて年未此
身をなすしとせしりし層の成身を知らんず此子小野天神
乃此神體を合祀りて福あらしむるを此眷属乃老

松乃明神此神體遍身より行かいて此是子也此若なる
 を不思儀なりきりてハ神慮子かふひて遂徒遠路何の
 疑がるべきとのみひりきり此途ひよ系する此長途何め
 随ひまのりくるをまじも徳運を仰きなる神慮を
 惡き心をかこめて此味方仕くると是神長途ホらん
 を引くや亂心あり味方なきにべきため光林房の軍中
 乃汁木言子すめなまを松丸と名乗より思ひいで
 神徳をかりたまて宮よりつかあきま海一圓を
 吉勝へ入せぬふを松丸ハ神織の何か」と名のせまひ
 武心業こつてつるるとと

圓方卷說神皇正統記卷五終



